Ｎｏ．２７７【２０１７年１０月６日配信】
赤い絲のモニュメント（担当：村上）

こんにちは。嘱託員の村上です。

皆さんは青い海公園にある「赤い絲のモニュメント」をご覧になったことがありますか。このモニュメントは太宰治の自伝的小説『思ひ出』に登場するエピソードをもとにした作品で、平成21 年（2009)、青函ツインシティー提携 20 周年を記念して青森市の青い海公園と函館市の「緑の島」に設置されました。制作者は彫刻家・峯田義郎（みねたよしろう）（山形県出身）で、作品名は「ふたり」といいます。

赤い絲のモニュメント（函館市　緑の島）

『思ひ出』に登場するエピソードというのは、太宰が青森中学に通っていた頃、秋の夜に港の桟橋から海峡を渡る連絡船を眺めながら、弟の礼治と運命の赤い糸について語り合ったというものです。『思ひ出』には授業中に国語教師から「右足の小指」に目には見えない赤い糸が結ばれているという話を聞いたとあり、大正 15 年（1926）1 月 26 日の日記にも先生から「足にヒモが結ばれて居る」という話を聞いたと記されています。

青森中学で太宰の二年後輩だった小野正文（元青森中央短期大学学長）は国語教師の橋本誠一から「目に見えない赤い糸」の話を聞いたことがあるといいます。つまり、太宰が赤い糸の話を聞いたのも橋本の授業の時だったと考えられます。

さて、運命の赤い糸というと現在では手の小指に結ばれているというイメージですが、太宰の話では「右足の小指」となっています。これはどうしてでしょうか。

実は、運命の赤い糸の話は中国の唐の時代の故事が原型だといわれています。それは伝奇小説集『続玄怪録』に収録されている「定婚店」という話で、将来夫婦になるべき男女の足を、生まれるときにこっそりと「赤縄」で結びつける月下老人（結婚を司る神）が登場します。

「赤縄」の故事は江戸時代には日本でもかなり普及し、明治時代には男女の縁を表すものとして「赤縄」という言葉が一般的に使われるようになっていたようです。橋本が授業で話したのは足に結ばれる「赤縄」のことだったと推測されます。

また、この「赤縄」がいつ赤い糸という言葉に変わったのか、はっきりとしたことはわかっていませんが、赤い糸について研究した古田島洋介によれば、昭和８年（1933）に発表された『思ひ出』が初出である可能性が高く、もし初出でなかったとしても、赤い糸という言葉の普及に大きな影響を与えたと考えられるということです。

赤い絲のモニュメント（青い海公園）

※今回の内容は古田島洋介「明治以後の「赤い糸」」（『明星大学研究紀要　日本文化学部・言語文化学科』第四号　1996 年）、小野正文「評伝　中学生時代」（『国文学解釈と鑑賞』平成５年６月号）などを参考にしました。